

## 刊行にあたって

小島美子

本書は昭和六十年（一九八五）度から六年間にわたって行われた国立歴史民俗博物館の特別研究（後に特定研究に変更）「日本歴史における地域性の総合的研究」（研究代表者 土田直鎮）の課題C「民俗の地域差と地域性」の研究成果報告書の第二冊めに当たる。

本研究の課題と研究計画・研究組織・研究経過については、研究成果報告書の第一冊めに当たる『国立歴史民俗博物館研究報告』第四三集の最初に述べたので、ここではくり返さない。ただ本研究の最初の研究代表者は故坪井洋文であったこと、坪井にとってはこの研究が最後の共同研究であり、日本民俗学にとって地域性研究が日本文化の多様な性格を明らかにするための、きわめて重要な現代の課題であるという坪井の認識があったことだけは、くり返しておきたい。この坪井の問題意識に対して、本研究はまことに残念ながら、十分な成果をあげたとはいえない。その最大の問題は、当初から地域性の概念について共同研究者の間で考え方のずれがあったということである。そのため地域性とは何かについて討論も重ねられたのだが、結局そのずれは解消しなかった。ただ、今になって振り返ってみると、そのずれは単に本共同研究だけの問題と

いうよりは、本書の岩本通弥論文が詳細に述べているような、日本民俗学界を流れていた二つの潮流を反映したものだかも知れないと思われる。地域性をめぐって果てしなく続いた議論は、ときに稔りのない無為の時間であるかのように私には感じられたが、それはこの二つの潮流がぶつかりあってできた渦潮のような時間だったとも考えることができよう。あるいは民俗学史における一つの時代的な区切りの溝にあったのかも知れない。その意味ではこの研究で十分な指導性を発揮されないうちに急逝された坪井洋文が、生きておられればどのように指導されたか、まことに残念な思いがするのである。

さてこの研究成果報告書の第一冊は、本研究が定点調査地とした青森県東津軽郡平館村、福島県会津若松市幕内、新潟県佐渡郡相川町、静岡県沼津市大平、奈良県天理市荒時、熊本県荒尾市孤屋の調査報告であった。この第二冊めは、一、定点調査の成果をもとにした、民俗の地域差と地域性に関する論文、二、民俗の地域差と地域性に関して、原理的な議論を展開する論文、三、民俗の地域差と地域性に関する各論の三つのうち、いずれか一つを共同研究の参加者が自由に選んで執筆するという

計画になっていたが、ほぼその通りの論文を収めることができた。

本書の構成は、まず第一に原理的な議論に関する論文七篇、第二に各専攻分野における地域性に関する論文二篇、第三に、定点調査地を含む実地調査をもとにした地域性についての論文二篇を集めた形になっている。

本調査が始まってからすでに八年を経過しているが、その間に日本の社会と文化はかつて経験したことのない猛スピードで変化している。日本全国が都市文化の巨大な波の動きに侵されて、地域差や地域性の問題も大きく動いている。この動きも直視して、いわばまるごと捉えてしまうことも、この共同研究は要請されていた。第一冊の調査報告でも、一部の論文にはその要請に応えようとするものがあつたし、本書でも湯川洋司論文などにその姿勢が見えるが、今後こうした視点はますます必要になるだろう。

なお、本共同研究を進める過程で、民俗の地域差と地域性に関する従来の研究のうち、重要な基礎的文献をリストアップし、昭和六十年三月に『民俗の地域差と地域性文献目録(稿)』を出版した。また『民俗の地域差と地域性——中間報告II——』に、その追補として、いわばその統篇と、定点調査地に関する文献目録を掲載している。またその後も追補を行っているので、本書にそれらのうち定点調査地に関する文献は除き、全体をとりまとめ、本書の巻末に付した。

また本成果報告書の第一冊めの出版準備中に行方不明になった香月洋一郎氏の論文「ムラの成立伝承とその構造を中心に——高知県長岡郡大

豊町岩原——」の大量の写真・図版はまだ見つからない。そのため、本書にもまたこの論文を掲載することができなかった。そのことが本心に心苦しく、香月氏、香月氏の調査に協力された大豊町の方々、またこの共同研究の研究者、そしてこの論文を読まれるはずであった多くの方々に重ねて深くお詫び申し上げる。

最後に本共同研究にご協力下さった調査地の皆様、ご指導賜った研究者の皆様などに深く感謝申し上げますとともに、故人となつてしまわれた「日本歴史における地域性の総合的研究」の研究代表者土田直鎮、課題C「民俗の地域差と地域性」の最初の研究代表者坪井洋文のお二人に、本調査がこのような形で終了したことを、謹んでご報告したいと思う。

一九九三年三月三十一日

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)